

【書評】星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介（編）
『チベット牧畜文化辞典（チベット語・日本語）』
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2020年、xl+448pp.

藤原敬介

帝京科学大学

主要語句：アムド・チベット語^{注1}、牧畜文化、辞典編纂、言語調査

1 はじめに

本書は、チベット東北部にあたるアムド地方ツェコ県のメシュルという地域（中国青海省海南チベット族自治州ツェコ県北部のメシュル; p. xv^{注2}）における牧畜語彙を収集し^{注3}、意味分野別にまとめた辞典である。書籍版だけでなく、PDF版、ウェブ版、iOS版が公開されており、おおくの見出し語について音声をきくこともできる^{注4}。

本辞典作成のきっかけとなったのは、共著者の一人である別所裕介氏の提案であった。別所は次のようにのべる。「私たち「チベット牧畜語彙収集プロジェクト」の研究チームが立ち上がる数年前から、現地牧畜社会ではチベット語の伝統知識の継承を目的とする複数の草の根の民間団体が活動していた。その筆頭格である、三江源の中核に位置する青海省ゴロク州の名刹・ラジャ僧院付属の私設学校（小学校から高校までを擁する）では、牧畜語彙に特化した図版入りの小辞典が刊行されていた。牧畜社会で用いられる生活用品や家畜種の写真画像に短いキャプションを付したこの辞典は、現地で幅広く普及し、他地域の私設学校で貴重な母語教育の教材として用いられ、村々の小学校でボランティア活動として実施される児童向けの「チベット語（母語）語彙検定」で、問題作成用に活用されたりしている」（p. xiv）という状況がすでにあった。そして、「現地にすでにあるニーズを汲み上げ、これに側面からの支援を行うことで、彼ら自身が「牧畜の価値」を自らのために定位していく手伝いができるかもしれない」（p. xiv）という問題意識のもと、星泉教授を代表とした「チベット牧畜語彙収集プロジェクト（通称）」（p. v）がたちあがり、2014年から活動を開始していくこととなった。

本書のパイロット版はすでに2018年春にはいちおうの完成をみた。なぜ2018年であったか。それは、プロジェクトの年限や研究報告書作成の都合といったこともあったかもしれないけれども、「祝祭」に参加するためであった。「祝祭」とは、三年に一度開催される国際チベット学会議（Seminar of International Association for Tibetan Studies）であり、2019年にはパリで第15回大会の開催が予定されていた。辞書づくりという、おわりがみえず、根気が必要な作業を

注1 「・」をもちいず、「アムドチベット語」と表記する立場もある。本稿では、本辞典の方針を尊重し、「・」をもちいる。

注2 以下、本稿で本辞典からの記述に即して紹介するばあい、できるだけ該当ページもしめす。

注3 この地が調査地としてえらばれたのは、共著者の一人である南太加氏の故郷であることによる（p. v）。

注4 詳細はチベット牧畜文化ポータル（2021年4月13日確認）を参照。

とにかくもすすめ、形あるものにするためには、目標が必要である。大会に参加し、「チベット
牧畜語彙収集プロジェクト」について発表することは、プロジェクト参加者にとってちょうど
よい目標であった。そして、研究チームは実際に大会に参加し、“Outcomes and Prospects of a
Multimedia Dictionary on Tibetan Pastoral Culture”というパネル発表をおこなった^{注5}。これを
星 [2020] は質疑応答で「祝祭」と表現していた。

パイロット版の発表から二年をへて完成したのが本書である。パイロット版は「全ての語彙
項目をチベット語の辞書順に配列したものであり、チベット語の辞書としては使いやすいもの
であったが、チベット語を知らない読者にも牧畜文化に触れてほしいという編者の意図を十分
に表現できていない配列であった」(p. vi)。書籍版は「辞書順に配列したリストはチベット語
索引として巻末に掲載した上で、本編は収集した語彙を文化項目別に分類・配列した28章立て
の分類辞典として新たに編集しなお」(p. vi) したものである。A5版で500ページほどにまと
められたこの辞典に28章に4893件が立項されている(p. v)。

28章とは、次のとおりである。

1. 宿営地と放牧地
2. 地形・天候・天体
3. 植物と動物
4. 家畜の名称
5. 放牧作業
6. 家畜の個体管理
7. 交尾・出産・去勢
8. 搾乳と乳加工
9. 屠殺・解体
10. 食肉加工と部位名称
11. 糞
12. 毛と皮革
13. 役利用
14. 食文化
15. 服飾文化
16. 住文化
17. 日常の行為と道具
18. 暦と度量衡
19. 人間関係
20. 経済活動
21. 冠婚葬祭

^{注5} 第15回国際チベット学会議の要旨集(2021年4月12日確認)による。

22. 娯楽
23. 宗教的観念
24. 宗教的行為
25. 宗教的存在
26. 法具と呪物
27. 宗教的な場所と建造物
28. 新しい政策・技術・道具

さらに各章は細分化されている。たとえば第1章であれば、「1.1 宿営地（1.1.1 宿営地の種類、1.1.2 宿営地の構成、1.1.3 水汲み場）、1.2 宿営地の移動、1.3 放牧地（1.3.1 放牧地の種類、1.3.2 放牧地の管理）、1.4 草地（1.4.1 草地の日当たり、1.4.2 草地の状態、1.4.3 草地の評価）」(p. 3) となっている。

もとより評者には、全28章をまんべんなく紹介する技量などない。以下、評者にとって気になった点を中心に、本辞典を紹介する。

2 本辞典の内容について

2.1 表記について

本辞典での見出し語の表記は、チベット文字による表記、チベット文字表記のラテン文字転写、音韻表記という三種類がみられる。このうちチベット文字表記とそのラテン文字転写については特に問題がない。だが、音韻表記については注意が必要である。

評者には、前鼻音をふくむ前置子音の表記について、疑問におもえる点があった。アムド・チベット語メシュル方言は、他のアムド・チベット語牧区方言と同様に^{注6}、声調が弁別的ではないかわりに、豊富な頭子音連続がある (p. xxvii)。星 (p. xxxi) によれば、メシュル方言には C_2C_1 という子音連続がある。 C_1 が主子音であり、 C_2 が前置子音である。前鼻音は前置子音の一種である。また、星 (p. xxxii) によれば、前鼻音には二種類ある^{注7}。 $^n/$ は、後続する主子音と同一調音点で実現し、 $^m/$ は、後続する主子音と調音点が異なる。したがって、実際の音声として $[^mb]$ のような音連続があったばあい、本辞典での音韻表記としては $^mb/$ となる。 $^mb/$ はならない。このような解釈は、音韻論的にはありうる解釈である^{注8}。しかし、言語学的な素養がなければ、理解するのはむずかしいかもしれない。

前鼻音については高度に音韻論的な解釈をする一方で、その他の前置子音については、音韻論的な解釈よりも実際の音声を重視している面がある。たとえば星 (p. xxxiv) によれば前置子音 $^{\phi}/$ は無声の主子音の前にのみあらわれる。他方、前置子音 $^{\beta}/$ は有声の主子音の前にのみあらわれる。両者は相補分布している。したがって、両者は一つにまとめて、 $^{\phi}/$ のみを音素とし

^{注6} たとえば鈴木 [2004] や海老原 [2019] を参照。

^{注7} 前鼻音というばあい、同一調音点の子音に先行するものしか前鼻音とみとめない立場もある (鈴木博之氏の教示による)。

^{注8} チベット語の音節構造をめぐる問題については鈴木 [2005] も参照。

てみとめることもできる。同様のことは、前置子音/^β/と/^ʀ/、/^x/と/^ɣ/についてもあてはまる。

前鼻音についておこなったような音韻解釈を、上記の前置子音についておこなわない理由は理解できる。本辞典は現地のチベット人にも容易に利用できることを意図しているからである。相補分布しているから一つの音素にまとめるということは、言語学者だけを相手にしているならばよい。しかし、一般のアムド・チベット語話者に対しては、実際の発音にちかい表記を提示するほうがよいという判断であろう。ただし、そうであるとしたら、/^mb/ではなく/^{mb}/でもよいのではないかという疑問はこのころ。

2.2 分類方法

辞書といえば、各言語での文字配列順に編集されることが現在では一般的である。実際、本辞典のパイロット版もチベット文字の配列順に作成されていた。他方、未記述言語の隣地調査においては、意味分野別に分類された調査票をもちいることが一般的である。そして、その調査結果を公表するばあいにおいても、語彙集であれば意味分野別に配列されたもののほうがむしろおおい。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所がかかわっているものだけでも、たとえば調査票としては東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編 [1966] や *Saya U Aung Kyaw* ほか [2001]^{注9} などがあるほか、辞典や語彙集としても新谷忠彦教授や梶茂樹教授による一連の著作（たとえば *Shintani* [2008] や *Kaji* [1992]）は、ほぼすべて意味分類によって配列されている。『アジア・アフリカの言語と言語学』に発表される基礎語彙資料も同様である（加藤 [2008]、原 [2009]、大塚 [2013] など）。

本辞典も意味分類によって配列されている点では、上述の諸研究とかわるところはない。しかし、本辞典が異彩をはなつところは、既存の言語調査票に依存せず、牧畜文化に特化しているところである。共著者の山口哲由氏によれば、意味項目の選定はマードックほか [1988] を参考としている。だが、それだけではチベット牧畜社会を十分に捕捉することはできない。そこで、「文化項目にかかる先行研究も参照しながら分類した語彙を精査し、抜け落ちていた要素や階層構造などを再検討することにより、さらに次の単語収集をおこなっていった。このように語彙の収集・分類・項目の再検討という作業を繰り返すこと」(p. xx) によって、現在ある 28 章にまとまったということである。

文化項目による配列にはさまざまな利点がある。一例として、山口はヤクと羊の例をあげる。山口による解説を再掲すれば、次のようになる^{注10}。「例えば、「be'u」という語は 0-1 歳のヤクを指すが、チベット語の辞書配列で並べた場合、家畜の呼び方として「be'u : 0-1 歳のヤク」という単語があることしか分からない。しかし、実際には 0 歳から 6 歳までのヤクを年齢に応じて呼び表す体系的な語彙があり、これらの語は家畜の個体を管理する様々な場面で使用される。一方で羊に関しては「生後 10 日までの仔羊」、「生後 10 日-満 1 ヶ月の仔羊」、「生後 1 ヶ月の仔

^{注9} この調査票の作者は新谷忠彦教授である。

^{注10} 原文のチベット文字表記は原則として割愛した。

羊^{注11}、「生後2-4ヶ月の仔羊」、「生後5ヶ月-1歳の仔羊」のように、0歳から1歳までをさらに分ける語がある。仔羊の毛皮の価値は非常に高く、その品質は生後数ヶ月で変化することから、より細かく呼び表す語彙が発達してきたと考えられる。このように家畜の年齢区分に関して、ヤクと羊という項目ごとに見ていくことで牧畜文化の理解に繋がる」という。

ここまでふみこんだ分析をせずとも、ただ項目をながめているだけでもたのしめる。たとえば「ヤク」でいえば、99ページから112ページにかけて、ひたすら「ヤク」の個性について記述される。毛色、角の有無や形状について、豊富な写真とイラストにより、ひとことで「ヤク」といっても、さまざまに分類されていることがわかる。

あるいは「馬」をとってみても、成長段階別の名称 (p. 72)、利用目的による名称 (p. 75)、群れとして見たときの名称 (p. 76)、美称 (p. 76)、品質による名称 (p. 76)、歩き方による名称 (p. 77) といったさまざまな区別があることがわかる^{注12}。

このように、本辞典は牧畜文化に特化したことによって、通常の辞書では記述されることがない区別にまでふみこみ、百科事典的な性格をもっているところに特徴がある。

2.3 語彙

2.3.1 糞

本辞典の語彙にかんして傑作というべきは、星 [2021: 14] もすすめる「糞」だけをあつかった第11章である。なぜ「糞」だけがあつかわれるかということ、「樹木が少ないチベットの多くの地域では、家畜の糞を乾燥させて燃料として利用する」(p. 171) という文化的背景があり、「糞」は重要な資源であるからである。

「糞」にまみれたこの章は、「ヤク糞」からはじまる。そして、「排泄したばかりヤク糞」が生々しい写真とともに紹介される。つづいて「ヤクが出掛けに排泄した糞」があらわれる。解説によると「放牧に出かける前に糞を排泄することがあるが、それはまだ温かく、冬の寒い朝などに加工するのに楽である」とのことである。その後も「春夏の新芽を食べて排泄された湿ったヤク糞」、「冬の終わりや春の始めに土や枯れ草などを舐めて排泄した糞」、「初乳を飲んだヤクの仔畜が排泄した黄色い糞」、「初乳を終えて草を食べ始めるまでのヤクの仔畜の糞」、「0-1歳ヤクの排泄した糞」、「1-2歳の仔ヤクが冬にする糞」、「春夏の青草を食べて排泄された乾燥ヤク糞」、「両手の間で絞り出して加工したヤク糞」、「握って整形した燃料用のヤク糞」などをつづく。

この章をよむだけでも、糞に対する見方がかわってくるだろう。

^{注11} 山口による原文では'phra ma rong のように表記される (p. xxi)。だが、本辞典での当該項目では'phran lug とある (p. 66)。

^{注12} 「馬」だけでもここまで丁寧に分類されているのを見ると、ふだんの調査で「馬」を「馬」としか記録していないことがはずかしくなってくるほどである。

2.3.2 色彩語彙をめぐって

語彙について、特に評者の目についたのは色彩語彙である^{注13}。

たとえば「ヤクの外貌表現（毛色）」(p. 99) をみると、ヤクの毛色には基底色というものがあり、それを重複して使用したり (ser ser「亜麻色の個体」p. 100)、色調をあらわす語と結合したり (ser nag「黒味がかった亜麻色の個体」p. 100)、体の特定の箇所をあらわす語と結合したり (ser ling「亜麻色で角ありの個体」p. 109) することによって、ヤクのさまざまな種類を分類することができる。ここで基底色とよばれるものには、黒、焦茶、亜麻（明るい茶）、薄亜麻、灰、白、白黒まだら、白・亜麻・灰・黒の混じった多色、がある。

他方、「羊・山羊の外貌表現（毛色）」(p. 112) にも、ほぼ同様の説明がある。ただし、こちらでは基底色として、黒、墨色、焦茶、赤茶、亜麻色（明るい茶）、灰茶、灰、白、白茶まだら、白黒まだら、多色、がある。

さらに「馬の外貌表現（毛色）」(p. 118) にも、ふたたび同様の説明がある。ただし、ここでは基底色として、黒^{注14}、濃茶、明るい茶、キャメル、薄いキャメル、灰、白、白地に斑点、多色、がある。

三者を比較すると、ヤクと羊・山羊はよくにているけれども、馬はやや異なることがわかる。

さらに「色」(p. 310) を参照すると、この言語における基本色彩語彙は、白、黒、青（灰色）、赤、黄（亜麻）であると推定される^{注15}。

Berlin & Kay [1969] の研究により、色彩語彙の発展には段階があることが知られている。すなわち、すべての言語に白と黒があり、三色あるならば赤がくわわり、四色あるならば緑または黄があり、五色あるならば緑と黄があり、六色ならば青がはいってくる。

しかしながら、上記のアムド・チベット語メシュル方言における基本色彩語彙には緑がはいっていない^{注16}。またヤク、羊・山羊、馬の事例からは、通常は基本色彩語彙とはいえないような色までも、区別に必要な基底色として使用されていることがわかる。通言語的な観察からみちびきだされた一般化に対して、個別具体的な事例が再考をうながす例といえるだろう。

^{注13} 色彩語彙以外についていえば、たとえば天候のところ「虹」や「天気雨」といった語彙があがっていないことも気になった。牧畜文化とは関係がないということだろうか。

^{注14} ヤク、羊・山羊、馬に共通して「黒」が基底色として使用されている。本辞典を参照すると、「黒」を重複した nag nag という形式が、「[馬][ヤク][羊] 全身が黒い個体」という訳語をあてられて、三回あらわれている。そして「全身が黒い馬を指すことが多いが、ヤクについても、遠くから角の有無が判別しにくい場合、この呼称で呼ぶことがある。」という解説がある。基本となるデータはおなじであるから、「ヤク」の項目 (p. 100) でも、「羊」の項目 (p. 112) でも、「馬」の項目 (pp. 118-119) でもおなじ解説である。「ヤク」と「馬」の項目でこのような解説があるのは問題がない。しかし「羊」についてもおなじ解説であるのは、そもそも黒い羊がいるのかということからして、違和感があるところである。

^{注15} 色彩語彙には、形容詞をあらわす po という要素をふくむものがおおいようである。だが、「色」(p. 310) には po をふくまない語形として ljang khu「緑」もあがっている。

^{注16} ただし、「色」(p. 310) によれば、「青」は草地の色については「緑」をあらわし、ヤクや羊の毛色としては「灰色」をあらわす。おそらく本来的には「青」である。

2.4 言語の選択

すでに提示したいくつかの例からもみてとれるように、本辞典に記載される単語は、とにかく具体的である。これだけ具体的に丁寧に記述できた理由は、調査者たちがチベット語に堪能であるだけでなく、母語である日本語で記述したことがおおきい。私見では、日本語を母語とするものにとっては、日本語で発表することがもっともまちがいがすくない^{注17}。

本辞典は、表紙くらいにしか英語の訳語はない。中国で調査しているにもかかわらず、漢語もでてこない。国際的な学術プロジェクトの成果であるけれども、日本語とチベット語しか使用されていない。「外国人との連名で／英語で論述した／個別のテーマについての報告論文を／量産する」ことが「国際性ある活発な学術活動を展開していると評価される傾向」[池田 2019: 24]がある時代であって、これだけの成果を日本語とチベット語だけで出版したことの意義はおおきい^{注18}。

もっとも「本辞典は今後、チベット語・英語版、およびチベット語・チベット語版の刊行を予定して」(p. vi) いるとのことである^{注19}。

3 調査の失敗からまなぶ

星 [2020] でかたられ、星 [2021] で活字にもなったように、本辞典の編纂にはおおきな失敗があった。それは、調査を開始してから四年目におとずれた。

それまでの調査によって、牧畜文化全体をみわたせるところまでやってきたと著者たちは感じていた。しかし、まだ手薄な分野があった。伝統的には男性の仕事であったテントづくりに代表される皮革関係の語彙であった。そこで、調査協力者に依頼し、テントづくりにくわしい老人を紹介してもらった。意気揚々と調査にのぞみ、テントづくりに関連してききたいとおもっていたことは十分にききだすことができた。

しかし、調査がおわってから、調査協力者にいわれた一言に頭をなぐられた感じがしたという。「名うでの語り部を紹介したのに、あんな細切れな質問ばかりして、本当にもったいないことをした」と [星 2021: 14]。「思い返せば調査者本位の強引な質問を繰り返していたかもしれない。調査とはいえ、コミュニケーションだという基本をわすれていたのだ」と [星 2021: 15]。

こうした反省にたって、五年目の調査では、自分たちがききたいことだけをきくのではなく、

^{注17} 評者は Huziwara [2016] で少数民族にかんする英語による辞書を出版した。しかし、なれない英語で無理をしたせいもあり、記述にも英語にもかなりのまちがいがあつた。それだけに、はじめから日本語とチベット語にしぼった本辞典の判断はただしいと感じている。

^{注18} 英語なしに出版されているにもかかわらず、ウェブページで公開されていることもあってか、本辞典はすでに国際的にしられた存在となっている。たとえば、Randy LaPolla 教授によるチベット・ビルマ諸語研究にかんする国際的なメーリングリスト (Tibeto-burman-linguistics) でも、話題にあがっていたことがある (2021年4月1日の Kristine Hildebrandt 教授による投稿など)。

^{注19} チベット語版はともかく、英語版をだす予算と労力があるならば、ほかに優先すべきことがあるようにおもえる。現地の人々のことをかんがえれば、一番必要とされているのは、チベット語・漢語版であろう。

相手からの「語り」をひきだすようにつとめたという。その結果、「戦いの際に身につけるフェルト服」(厚手で防刃・防弾の役割を果たす)から「オオカミの落とし穴」(中に山羊を仕込み、食べようとしたオオカミを落とし込む)まで、予想もしなかった単語を大量にあつめることができたとのことである^{注20}。

本辞典では調査中に収集されたであろう「語り」そのものや、牧畜文化にまつわる民話そのものは収録されていない。「チベット牧畜文化民話集」であるとか「チベット牧畜民の語り」といった形式で、将来公開されることも期待される。

4 おわりに

以上、断片的にはあるけれども、『チベット牧畜文化辞典』を紹介した。

本辞典は、共著者として名前があがる四名だけでなく、数おおくの人々にささえられた仕事である。チベット牧畜文化をささえるメシュル地方の人々だけでなく、各種データベースの構築、音声切り出し、XeTeXによる組版を担当したチュラロックス、イラストを作成した漫画家の蔵西氏の貢献がとりわけおおきいように評者には感じられた。

本辞典は、以下にあげるプロジェクトの成果の一部であると謝辞 (p. x) にしるされている。

1. AA 研共同利用・共同研究課題「“人間一家畜一環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」(研究代表者: 星泉)
2. AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」(研究代表者: 星泉)
3. 科研費基盤研究 (B) 「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(課題番号 15H03203、研究代表者: 星泉)
4. 文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」(LingDy2)
5. 文部科学省特別経費「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)
6. 科研費基盤研究 (S) 「シナ＝チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」(課題番号 18H05219、研究代表者: 池田巧)
7. 科研費基盤研究 (A) 「乳文化の視座からの牧畜論考—全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」(課題番号 26257014、研究代表者: 平田昌弘)
8. 科研費若手研究 (B) 「東西方言から見たチベット語の基層の研究」(課題番号 26770137、研究代表者: 海老原志穂)
9. 科研費基盤研究 (C) 「標高帯モデルに基づく山地農業に対する気候変動の影響解明と計画的適応策の構築」(課題番号 19K06253、研究代表者: 山口哲由)
10. 科研費基盤研究 (C) 「ネパール・ヒマラヤ地域における中国主導の経済開発と『仏教の

^{注20} 鈴木博之氏によれば、牧畜民が口語でよく使用する謙讓表現 (humilific) が本辞典ではふれられていない。牧畜民の謙讓表現について詳細は Tsering Samdrup & Suzuki [2019] を参照。

政治』(課題番号 18K11786、研究代表者: 別所裕介)

11. 京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と
 相関型地域研究の推進拠点」共同研究「消滅の危機にあるチベット牧畜文化語彙に関する
 シソーラス辞書の作製」(研究代表者: 山口哲由)

本辞典の出版が可能となったのは、著者たちの日々の努力もさることながら、これだけおおくのプロジェクトと、それに付随する予算があったおかげであることもよくわかる。分野が異なる複数の専門家が協力し、5年以上の長期間にわたって国内外で共同研究をおこない、外部の会社にデータ整理を依頼し、プロの漫画家にイラストをかいてもらえるだけの予算があっただけで成り立っているようにも見える。

評者がしるかぎりでは、とりわけ少数民族の辞書をつくるような研究者は、たいていはごく少数の調査協力者を相手に、わずかな予算で(時には自費で)調査をおこない、プログラミング言語の心得がない評者のばあいなら、いまだに手作業でデータを整理している^{注21}。

「本辞典が単に、失われつつある言葉の記録と保存にとどまるのではなく、現地の人々と共に歩みながら、社会の隅に追いやられてゆきつつある牧畜という生業体系の知られざる価値までもを含めて発掘していく一助となることを、切に望む次第である」(p. xiv)と共著者の別所はのべている。だが、本辞典のプロジェクトのように、予算面でめぐまれたプロジェクトには、成果を書籍やウェブサイト、スマホのアプリ等の形式で公開するだけでなく、データベースの雛形と、データベースから辞書まで置換するプログラムを公開するところまでも^{注22}、評者としては期待したい。

なお、「本辞典に関連する読み物としては、AA 研広報誌『FIELDPLUS』17号の巻頭特集「チベット牧畜民の「今」を記録する」、および小冊子『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(3号と4号に牧畜文化特集)^{注23}(p. vi)がある。また、本辞典作成にまつわる体験談が星[2018、2021]にあり、どちらもおすすめである。

本辞典はいちおうの完成をみただけでも、チベット牧畜文化の研究は今もつづいている。本辞典の共著者でもある海老原志穂氏を中心となって、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で2020年から「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」というプロジェクトがはじまっている。このプロジェクトでは、本辞典の経験をかしながら、さらに広域のチベット文化圏を射程に入れて、牧畜文化の研究をおこなうようである。チベット牧畜文化研究の今後の進展もたのしみである。

^{注21} たとえば T_LEx のようなすぐれた辞書編纂ソフトはあるけれども、XeTeX と連携させたいというようなことになると、それなりにプログラミング言語の心得がなければならない。

^{注22} ツバル言語文化辞典(2021年4月13日確認)では、本辞典で中心的役割をはたした星教授が辞典編纂アドバイザーとして参加し、チュラロックスの協力のもと、本辞典と同様のウェブサイトが構築されている。このようなデータベース構築のためのプログラムが、たとえば GitHub などで公開されることを期待したい。

^{注23} 星ほか [2016、2017] である。

参考文献

- 池田巧. 2019. 「Book Review: 嘉戎語の絢爛たる接辞の構築を記述してその機能と意味を解析する (長野泰彦著『嘉戎語文法研究』汲古書院)」『東方』458 (2019年4月): 20-24.
- 海老原志穂. 2019. 『アムド・チベット語文法』ひつじ書房.
- 大塚行誠. 2013. 「ビルマ語パロー方言基礎語彙」『アジア・アフリカの言語と言語学』8: 163-200. <http://hdl.handle.net/10108/75670>
- 加藤昌彦. 2008. 「ゲバー語基礎資料」『アジア・アフリカの言語と言語学』3: 169-219. <http://hdl.handle.net/10108/51105>
- 鈴木博之. 2004. 「アムドチベット語チャプチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』23: 145-165. <https://doi.org/10.14989/87841>
- 鈴木博之. 2005. 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』69: 1-23. <http://hdl.handle.net/10108/20212>
- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (編). 1966. 『アジア・アフリカ言語調査表 (上)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 原真由子. 2009. 「バリ語山地方言の語彙資料」『アジア・アフリカの言語と言語学』4: 259-296. <http://hdl.handle.net/10108/61393>
- 星 泉. 2018. 「チベット牧畜語彙の収集と辞典編纂」『チベット文学と映画製作の現在 SERNYA』5: 188-195.
- 星 泉. 2020. 「夏の草原で物語を聴く: フィールドワークの失敗と再挑戦」、リンディフォーラム: ウェビナーシリーズ (6)、2020年12月8日. <https://lingdy.aa-ken.jp/activities/research-events/201208-1dforum> (2021年4月11日確認).
- 星 泉. 2021. 「テントを育てる人とともに作る辞書」『図書』865 (2021年1月号): 12-15.
- 星 泉ほか. 2016. 「牧畜民の暮らしと文化」『チベット文学と映画製作の現在 SERNYA』3: 6-65.
- 星 泉ほか. 2017. 「牧畜民の暮らしと文化 Part 2」『チベット文学と映画製作の現在 SERNYA』4: 6-49.
- マードック、ジョージ P. ほか (編). 1988. 『文化項目分類』国立民族学博物館.
- Berlin, Brent & Paul Kay. 1969. *Basic color terms: their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.
- Huziwara, Keisuke. 2016. *Cak-English-Bangla dictionary: a Tibeto-Burman language spoken in Bangladesh*. Dhaka: A H Development Publishing House.
- Kaji, Shigeki. 1992. *Vocabulaire Hunde*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).
- Saya U Aung Kyaw, Caw Caay Hân Mai & Caw Khun Aay. 2001. 『シャン文化圏言語調査票』寮庵汎而学研究所.

Shintani, Tadahiko. 2008. *The Mun language of Funing county : its classified lexicon*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).

Tsering Samdrup and Hiroyuki Suzuki. 2019. “Humilifics in Mabzhi pastoralist speech of Amdo Tibetan”, *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42(2): 222–259. <https://doi.org/10.1075/ltba.17008.sam>

(附記) 草稿段階で海老原志穂氏と鈴木博之氏から有益なご意見をいただいた。

受理日 2021 年 4 月 13 日